ホンキで語ろう サイエンスの未来

科学にもっと親しんでもらおうと、WPI（世界トップレベル研究拠点プログラム）による「第6回WPIサイエンスシンポジウム」が2月11日、東京都の日本科学未来館であった。「これからの科学の話をしよう。」をテーマにした第1会場では、気鋭の科学者・実業家らが語り合う「ホンキギロン」、科学者同士の「スペシャル対談」などを開催した。

科学の先端を本音で

「ホンキギロン」では、豪州出身で出版社「シュプリンガー・ネイチャー」日本法人社長のアントワーン・ブーケ氏▽政策研究大学院大学名誉教授の黒川清氏▽筑波大学准教授の落合陽一氏▽ジーンクエスト社長の高橋祥子氏▽JSTさきがけ研究者の戸田陽介氏▽筑波大学国際統合睡眠医科学研究機構（IIIS）広報担当の樋江井哲郎氏――の6人が登場。それぞれの立場から科学や科学者に関して本音のトークを交わした。

ブーケ氏は、日本の科学研究がここ10年失速し、世界の大学ランキングの上位200大学で日本からは東京大学と京都大学だけだったことなどを挙げ、日本のノーベル賞受賞者も減るだろうと憂慮した。今後進展する科学技術の特徴は「一つの分野で定義できないもの」と指摘した。

黒川氏は、日本では大学入学時に学生が文系と理系に分かれてしまう現状や、独立した存在の研究者が少ないことなどを批判した。

戸田氏は元々農学で学位を取得したが、独学で情報科学の知識を習得した後、植物の画像から病気などを診断する「植物向けの人工知能（AI）」といった新たな分野で研究に現在取り組んでいることを説明。異分野を融合した研究に取り組んだ理由を「自分なりの独自性を加えて勝負していかないと思っていた」と話した。

高橋氏は、人間の唾液を基に、体質や健康リスクなどの情報を本人に提供する会社の事業を紹介。「何に役立つか分からないような研究をする方針で、生命の謎を解き明かすための研究にも注力している」と述べた。

若い人に期待

メディアアーティストでベンチャー企業経営も手がけ、学長補佐も務める落合氏は、日本の大学では「椅子取りゲーム」が行われていると独特の比喩で批判。大学院生の時に起業した高橋氏も、大学に残って研究を続けて教授になる進路では自分の努力で時間が短縮できないリスクがあり「会社を設立したほうがリスクが少ないと思った」と振り返った。

最後に全員が強調したのは、若い人の力。大学生、大学院生の時から外国に飛び出して、固定観念に縛られずに、研究分野を切り開いてほしい。組織の枠を越えて社会に飛び出してほしい。長期的に凋落傾向にある日本の科学を救うのは若い人である――とアピールした。

会場は学生らでほぼ埋まり、最後の質問時間に「中学生のうちにやっておくべきものは？」と中学生が尋ねる場面もあり、参加者からは「日本の科学の発展に何が足りないのか新しい視点が得られた」などの声が聞かれた。

ふたつのスペシャルな対談

「宇宙×地球」と「植物×動物」をテーマに最前線の研究者が語り合い、聴講者は日本科学未来館の科学コミュニケーターとともに探究心を深めていった。

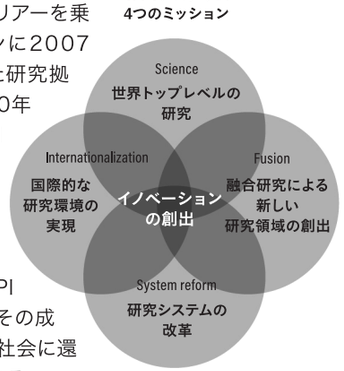
第2会場では、WPI11拠点の展示ブースやサイエンスカフェがあり、来場者が実験や工作をしたり、研究者とおしゃべりしたりして、科学の最先端に触れていた。

アントワーン・ブーケ氏　黒川清氏　落合陽一氏
樋江井哲郎氏（ファシリテーター）　戸田陽介氏　高橋祥子氏

広告　企画・制作 毎日新聞社広告局

世界に開かれた研究拠点を目指して

WPIプログラムは、研究分野と国のボーダー、言語と制度のバリアーを乗り越えることをミッションに2007年、文部科学省が策定した研究拠点形成事業。発足以来約10年で、世界から目に見える11の研究拠点が日本各地に発足。その研究レベルは、ハーバード大学など世界トップの研究機関と肩を並べるまでになった。WPIは、研究活動だけでなく、その成果を高校生や市民など広く社会に還元することにも力を入れている。



文部科学省
世界トップレベル研究拠点プログラム
World Premier International Research Center Initiative
wpi
WPI
第6回 WPI サイエンスシンポジウムの模様を配信中！
http://live.nicovideo.jp/watch/lv310302702
（無料会員も視聴可／推奨ブラウザ：Google Chrome, Microsoft Edge）
wpi　世界トップレベル